

第7部会

害受容の歩み」として、社会と切り離して、個人化していこうとする考え方ではないのである。むしろ、この「自力・他力モデル」は、社会との関係性において成り立つ「転入物語」なのである。

つまり、「自力・他力モデル」は、自身の内面の「あゆみ」を第二十願の機の問題として考えることが可能である。しかし、それは社会的関係論が問われてこない場においては、「諸仏史観」を個人モデル化してしまうのである。逆に、いくら社会との関係性の中で「向下的生活道」の内実を検討していたとしても、一人の人の内面に現れた「三願転入」という「転依」の構造が問われてこない場においては、向下的生活道は、全くの空論となってしまうのである。つまり、真宗における障害者社会福祉の考え方は、個人の問題としての第二十願の機の問題を内包しつつも、向下的平等観の実践としての健全者と障害者の関係性としての「社会モデル」が問われてこなければ意味がないのである。

その上で、真宗障害者社会福祉は、向下的共生道という新たな価値観における創出運動なのである。また、健全者と障害者の関係性を考え、向下的平等観の実践としての「共生」であることを顕かにしたのである。健全者が抱える自らの健全者幻想と向き合い、自らが持つマジョリティー性を見つめることによって、これまでマジョリティー側が「健全」という指標を無意識的に優先してきた結果として生み出された「障害」問題が顕かに内在化される。それは、社会構造としての「障害者差別」の向き合っていく視座を得ていくことである。そこに至っ

てはじめて向下的共生運動の本質が社会モデル運動と同種の問題意識を抱える「社会運動」に転化していくと考えるのである。

三願転入とカウンセリング

——親鸞とC・ロジャース——

友久久雄

心の悩みを解決する方法として、洋の東西を問わず宗教家が関ることが多かった。特にわが国では、江戸時代からの寺請制度により、お寺と檀家との結びつきが強く、住職が檀家の人々の悩みに応じることが多かった。すなわち宗教的アプローチである。

しかし、第二次世界大戦後の社会変革により、これらの制度や習慣が稀薄となり、現在では、人々の心の悩みはもっぱら精神科医や臨床心理士のかかわりが中心となってきた。すなわち心理的アプローチである。

そこで本稿では、両者における心の変化過程を明らかにするため、宗教的アプローチとしては親鸞（一一七三—一二六二）を宗祖とする浄土真宗（以下、真宗とする）を、心理的アプローチとしては、C・ロジャース（一九〇二—一九八七）が開発した非指示的療法を取りあげ検討してみたい。

親鸞は、教行信証・化身土文類六において、真宗のプロセスを自身の経験により「三願転入」という形で示している。

この三願というのは、真宗の根本所依の經典といわれる大無量寿經にある、四十八願のうち、十八願、十九願、二十願という意味である。また転入というのは、転捨帰入の略で、自分のそれまでの心を転じて捨てさり新しい悟りの世界に入る（帰入）という意味である。すなわち、三願転入とは、三つの願を経て最終的な悟りの境地に入ったということである。

親鸞は、三願転入において行者の努力や修行の功德でもって成仏することを誓われた十九願から、行者が念仏を励みその功德により成仏することを誓われた二十願に転入し、またそこから行者が思いはかることの出来ない念仏の不思議な功德により成仏すると誓われた十八願に転入することを示したのである。

C・ロジャースは、彼の出世作である「カウンセリングと心理療法（一九四二）」において、カウンセリングの過程を大きく三つに分類している。

まず第一の過程は「感情の解放」である。すなわち、クライエント（以下、cl.とする）の感情を解放することにより、こころの奥底に潜在する問題を表出させる。このことによりcl.は、それまで抑圧されていた感情から情動的に解放され、自分自身の感情を素直に認知すると共にカタルシス（心の浄化）へと導かれる。

このカタルシスが次の過程である「自己洞察の成就」に結びつくのである。自己洞察は、カタルシスの経験から離れて存在するものではない。この自己洞察により、以前は認知していなかった新しい関連性に気づき、自己受容が可能となり、新しい目標設定が出来るようになる。そして、新しい自信と独立心が

養われる。

最後が「終結の段階」である。cl.に自信と独立心が養われると、cl.はカウンセリングを終えたいと望むとともに、同時に支えを失うことへの不安をもつ。この両価性をcl.は、はつきり自覚し、自分の問題として認識し、建設的に立ち向い自己決定することによってカウンセリングは終結する。

人の心の悩みに対応する、宗教的アプローチと心理的アプローチにおける心の変化過程は、いづれも大きく三つの過程に分類できる。宗教的アプローチの過程は、經典にみられる三願の中において、如何なる功德において成仏するかが重要な課題であり、心理的アプローチの過程は、cl.が如何に自分の感情をカタルシスに導き、自己洞察し、自立するかが重要な課題である。

真宗信者の宗教意識と

社会的行動に関する調査

ウーゴ・デッセイ

真宗ではこれまで倫理と社会運動という問題が慎重に扱われてきた。その主な理由は、創始者親鸞（一一七三—一二六二）が重視した「はからい」という教義、つまり自分の打算を捨てる必要性にある。親鸞は、人間は「はからい」を捨て「他力」という阿弥陀の働きに自らを任せることができると考え、「自